フラワーマスター

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フラワーマスター

【Ｎコード】
Ｎ５５３４Ｇ

【作者名】
愛田美月

【あらすじ】
アジュガ王国。王都アジェリアは花祭りでにぎわっていた。そんな中、密かに事件が起こった。フラワーマスターのアキレア・デュオンがその事件の捜査にのりだすが・・・＊＊＊春・花小説企画参加作品です＊＊＊

第一話　夜の語らい（前書き）

この小説は、春・花小説企画に参加した作品です。

第一話　夜の語らい

明かりのついていない室内に、唯一光を届けてくれるのは、大きな窓から入る月明かりだけだった。

女性は窓辺から月へと向けていた視線を外し、窓に片手をついたまま、背後を振り返った。そうすると、逆光によって、その優美な顔が暗い影に隠される。

「わたくしの願いを聞いてはいただけませんか？」

女性の声は儚く、暗い室内に吸い込まれるようにして消えた。

しばしの沈黙の後。男性の声が女性に答えを返す。

「あなたは酷なことをおっしゃる。私に友を欺けと？」

どこか揶揄するような響きを持つ低い声。女性の影がゆっくりと、首を横に振った。

「そうは言っておりません。わたくしはただ、彼がどうしているのか知りたいだけなのです」

それが、女性の切なる願い。

暗い室内。月明かりの届かぬ中で、女性は男性が身動きする気配を察する。

男性が、こちらに近づいてきているようだ。女性は窓辺から動かず、気配のする方を見つめた。

ゆっくりと、月明かりの下に現れたのは、黒髪のやけに背の高い男性の姿。

彼はゆっくりと口元に笑みを上らせた。

「それが問題だというのです。消息の定かではない彼のことより、あなたは今の家族を思うべきだ」

女性は顔を俯けた。男は淡々と言葉を紡ぐ。

「あなたには、優しい夫や、可愛い子どもがいる。それに、例え彼の消息が分かったとしても、彼に会うことが出来ないのは、あなたもお分かりでしょう。気持は分かるが、彼のことはもう、忘れるべ

きだ」
　男が口を閉じると、少しの間、静寂が辺りを支配した。
「逢えぬことなど、承知の上です。分かっているからこそ、わたくしは、彼のことが気にかかるのです。彼が今も無事で暮らしているか。彼のことが心配で、夜も眠れないのです」
　女性の答えに、男性は苦笑を洩らした。
「あなたは罪な人だ。私に秘密を共有しろとおっしゃる」
　女性はその言葉に、目を上げた。
「では……」
　喜びの声を上げようとした女性を制し、男性は髪と同じ漆黒の瞳を女性に向ける。
「私は、もうすぐナスタチウムに行く用事があるのです。帰ってきたら旅の話をお聞かせしましょう」
　ナスタチウム。それは、彼の居る場所。女性は男性の言葉をゆっくりとかみしめるように、目を閉じた。
「ええ。あなたがお帰りになるのを心待ちにしております」
　女性は祈るように、胸に手をあてた。

第二話　花びらの怪

アジュガ王国、王都アジェリアでは、春の訪れを祝う祭りが催されている。国内の者は勿論のこと、近隣諸国からも多くの見物客がやってくるほどの大きな祭りだ。

大通りには出店が並び、あちらこちらから臭覚を刺激する良い匂いが漂ってくる。広場では旅芸人たちの曲芸や、王宮付きの花使いたちによる、花魔法の催しなどもやっており、見物客の目を大いに楽しませていた。

見事な盛況ぶりを見せている大通りをよそに、王城の東側に位置する近衛将軍の執務室では、陰鬱な雰囲気が漂っていた。

「まったく、貴族の坊ちゃんたちは、他にやることがないのかねぇ」

心底呆れたというように、アキレア・デュオンは声を上げた。精悍な顔立ちが苦々しく歪む。眉を寄せ、切れ長の瞳を細めた。腹立たしげに頭を振った拍子に、黒くまっすぐな短髪が動きに合わせて揺れる。

「まったくだ。俺達がどんなに摘発したところで、また新しい麻薬を探してきやがる」

アキレアと同じように顰め面で吐き捨てたのは、この部屋の主にして、近衛将軍の地位に就くムスカリーだ。どちらも齢二十を半ば過ぎたといったところか。

近衛将軍の地位にふさわしい立派な体躯を持つムスカリーは、少し窮屈そうにアキレアの前の席に着いていた。腰にはその体躯に似合う大振りの剣を帯びている。

「そこでだ。フラワーマスターであるお前の見解を聞きたい。奴等の症状に何か思い当たる節はないか？」

その問いに、アキレアは無言で服の隠しから何かを取り出した。それを、二人の間に置いてある机の上に乗せる。それは、小さな子どもでも握りこめるほどの大きさしかない。

ムスカリーはそれを太く大きな指で摘まんで持ち上げた。薄く、柔らかな触感。以前は白かったであろうそれは、その色の名残を残しながらも、今は茶色くくすんだ色になってしまっている。
それは、そう。まるで。
「花びら……のように見えるな」
ムスカリーが言うと、アキレアは口元で笑みを形作った。
「当たりだ。さすがムスカリー将軍。それは患者の口の中から見つかった」
「口の中だって？」
ムスカリーは思わず大声をあげて、花びらを指から離した。花びらはひらひらと机の上に舞い落ちる。
ムスカリーの慌てた様子に、アキレアは意地の悪い笑みを見せた。
「大丈夫だ。ちゃんと乾かしてある」
そういう問題ではない。と、ムスカリーは思ったが、口には出さなかった。これ以上からかわれる種を増やす必要はない。この男はそういうことは見逃さない奴だからだ。
ムスカリーは嘆息して、呟いた。
「どうしてこんなもんが患者の口から出てきたんだ？」
ムスカリーは眉間に皺を寄せ、そして俄かに目を見開くと声を上げる。
「まさか、これが……」
「そう。これが麻薬の正体だ。ケンム草という名の花でな。普通に育てれば問題はないんだが、少し手を加えてやると、幻覚作用を引き起こす毒素が作られる。厄介な花なんだよ」
花の話をすると急に真面目な表情になる。さすが、フラワーマスターというべきか。フラワーマスターの称号を得るには、花使いとして、花魔法を体得し、あらゆる植物の知識を持たねばならない。植物には薬として使われるものも多く、薬術師としての一面も持つ。
俺には一生かかっても取れない称号だな。と、ムスカリーは思った。

実際、この称号を持っている人間は、ムスカリーの目の前にいるこの男、ただ一人だ。
ケンム草などという名の花があることすら、ムスカリーは初めて知った。そもそも、根っからの兵士であるムスカリーは、花に興味がないのである。
「だいたい西方に生息する花なんだがな。他国から流れてきたなら厄介だ」
そう言って、アキレアはムスカリーを漆黒の瞳で見つめる。ムスカリーはその顔立ちに似合う、不適な笑みを浮かべた。
「大丈夫だ。最西の地、ナスタチウムからくる商人が、幸福の薬として売りに来たという話が上がってきている。その商人はとっ捕まえてあるんだが、そいつが栽培しているわけではなさそうなんだ。元を断たねばまた同じことの繰り返しだからな。お前なら西に行きゃあ、すぐに見つけてくれるだろう。その花を。なあ、マスターデュオン？」
普段の呼び名ではなく、公用の呼び名を使ったムスカリーに、アキレアは肩をすくめて見せた。
「分かったよ。すぐに旅支度を整えて、出発するとしよう」
言い終わるや立ち上がったアキレアに、ムスカリーがふと、何かを思いついたように苦笑した。
「カボックが怒るだろうな。何も春祭りの最中に、旅に出なくてもってな」
ムスカリーの言葉に、アキレアは祭りの催しもの要員として駆り出されている真面目な弟子の顔を思い出した。

第三話　西のナスタチウム

「まったく、何も春祭りの最中に、こんな事件を起こさなくても。ウェンスター卿はご子息にどういう教育をなさっておいでなのか。こっちは仕事で大忙しだって言うのに。旅へ出ることになったって言ったら、皆から恨みがましい目で見られてしまいましたよ」

王都から西へ向かう旅をはじめてから、すでに二十日が経っていた。西にある街を転々と捜したが、ケンム草を栽培している形跡のある場所はなかった。残すところは最西の地、ナスタチウムだけである。

ナスタチウムへと向かう旅馬車の中、アキレアは弟子のカボックから先ほどのセリフをほぼ毎日のように聞かされていた。後ろで一つにくくった茶色い髪と、同じ色の目を細め、カボックはアキレアを見る。

「聞いてますか？　マスター」

狭い馬車の中。棘のある大きな声で言われ、負けじと大きな声でアキレアは答る。

「ああ、聞こえてるよ、聞こえてる」

いや、むしろ聞き慣れていると言った方がいいか。

カボックは、アキレアの反応に、ならいいんですけどねと言って、また話を再開した。

それを、右から左へ聞き流し、アキレアは馬車の振動に身をまかせながら、外の風景を眺める。

森を抜け、馬車は野原の中の道を行く。

春の訪れを喜ぶように、生き生きと緑を深くした草や木々。所々、緑の中に、白や黄の花が見える。

時折吹く風には、その花の芳香が混ざっていることだろう。

時折、小休止をはさみながら、ナスタチウムにある最西の街に着いた。日はすっかり西に傾き、空を茜色に染め上げていた。

街の中心にある広場に、旅馬車は停車した。御者の話では、今日はこの町に泊まり、また明日、王都へ向かう旅人を乗せて出発するのだという。旅馬車の御者とは大変な仕事だ。

アキレアたちは御者に、心付けを渡し、馬車を降りた。すると、待ち構えていたように、栗色の髪をした若い男性が近寄ってきた。

男はその優美な身体を質の良い衣服で包んでおり、一見してそれなりに高い身分であることが知れた。

男はアキレアに爽やかな笑みを向ける。その背後には、執事らしき人物が控えていた。

近くにいた人々が、物珍しげにこちらに視線を向けてくる。

「王都からはるばる、ようこそいらっしゃいました。マスターデュオン。こちらは、領主ブラシカ男爵にございます」

執事らしき人物が男をそう紹介する。ブラシカ男爵と呼ばれた男は、笑みを浮かべたまま、頭一つ分ほど背の高いアキレアを見上げている。

「それは、どうも。わざわざお出迎えいただき恐縮です。ブラシカ男爵」

アキレアは切れ長の目を細め、笑顔を作って見せた。

なぜ、フラワーマスターであるアキレアがここへ来ることを知っていたのか。そんな疑問はわかなかった。大方、前に立ち寄った街の領主から知らせを受けていたのだろう。前の町でも、同じような歓迎を受けていた。

「お目にかかれて光栄です。マスターデュオン。王都からの長旅、さぞお疲れでしょう。どうぞ、この地に滞在の間は、我が屋敷にお泊りください。もちろんそちらの従者もご一緒に」

柔らかな声音でそう告げた男爵の好意に、アキレアは甘えることにした。男爵の用意した馬車に乗り込む。いつの間にか集まってきた街人たちの間を通り抜け、屋敷へと向かった。

夕食は春の山菜を取り入れた、豪華なものだった。味も申し分なく、満喫した食事であった。
食後のお茶が出された後。ブラシカ卿が口を開いた。
「それにしても、マスターデュオン。こんな辺境の地までわざわざマスター自らお越しくださるとは。何かあったのですか？」
穏やかな声音で言われた問に、アキレアは近くに座るカボックに目を向け答えた。
「ここにいる弟子のカボックが、先日王宮付き花使いに任命されましてね。その祝いと、私からの卒業記念を兼ねて、花を巡る旅をしているのですよ。この地には、この地にしかない草花がたくさんある。勉強のためにもと、思いまして」
アキレアの話の半分は嘘である。旅をしている理由は嘘。カボックがもうすぐ、アキレアの弟子を卒業するのは本当の話である。
「王宮付き花使い！　それは、おめでとうございます。カボック殿」
花使いとは、花魔法を主に体得した者の呼称である。
元来、この国では自然を操る魔法が多く、それを細分化することで、その発展を助けてきた。細分化した魔法の一つが花魔法であり、その使い手たちに、国はそれなりの地位を与えている。
植物を操る力は、時として国を助け、時として国を脅かす存在になりかねないからだ。
ブラシカ卿から声をかけられ、カボックは一瞬驚いた顔をした。それを取り繕うように、柔和な顔に笑みをのせる。
「ありがとうございます」
それだけ言って、口を閉じた。カボックは元来お喋りな性格だが、時と場合を考えることができるのである。
「そこで、ブラシカ卿。この屋敷の裏にある森を散策したいのですが」
穏やかに話を変えたアキレアに、ブラシカ卿は笑顔で頷いた。
「ええ、構いませんよ。お好きに見てください。なんなら、珍しい

花や草のある場所を知る者に案内させましょう」
「ご厚意に感謝します」
アキレアはそう答えて、何か言いたそうな顔を向ける弟子をよそに、カップに残った茶の最後の一口を口に含んだのだった。

部屋に戻るや否や、カボックは不機嫌な声をだした。
「案内人をつけることを承諾するなんて。どうするんです？　ケンム草のありかを好きに調べられないではないですか。もう目ぼしい所はこの街くらいしかないのに」
予想に反することのないカボックの言葉をおかしく思いながら、アキレアはカボックの肩に手を置いた。カボックはさほど背の低い方ではないが、アキレアが高すぎるので、二人並ぶと頭一つ分アキレアの方が高い。
「案内人の相手はお前に任せるよ。俺はとりあえず街の様子を探ってみる」
カボックは嫌そうに、不満の声を上げた。アキレアは笑顔を作り、カボックの頭に手を置いた。力を込めると、カボックは黙った。

第四話　小さな友達

翌日。昨夜の約束通り、ブラシカ卿から案内人を紹介された。その案内人に連れられ、カボックとともに屋敷を出たアキレアは、森の入り口で二人と別れ街へ向かった。

できるだけ簡素な服を身につけてきたものの、アキレアは目立った。かなりの長身に加え、黒髪黒眼の容姿はこの地方では珍しいのである。

しばらく街中を、一人歩く。

大通り沿いに目的の店を見つけ、アキレアはその店に入った。

ここは薬術師の店。

つまり、薬屋である。狭く少し暗い店内は、当たり前だが薬品臭い。だが、アキレアにとっては、馴染み深い匂いである。

「いらっしゃい」

頭に白いものが混じった中年の男が、無愛想な顔を向けた。その男は、痩身を白い衣服で包んでいる。

この街には医師がいないため、薬術師がその変わりを務めているといっても過言ではない。

アキレアはその男に近づいた。

「やあ、あんたがこの店の店主か？」

「ああ。そうだが。あなたは、領主様のお客人じゃあないかね？」

始めは訝しい顔をしていた店主は、不意に思い出したように声を上げた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけどね」

アキレアは店主の問いには答えなかった。店主は腹を立てることもなく、肩をすくめた。

「話せることなら、話しますよ」

その答えに、アキレアは満足の笑みを浮かべる。

「最近、妙な患者はいなかったか？　おかしなことを言い出したり、

夢遊病の患者が増えたり……」
店主は変な顔をした。おかしな質問だと思ったのだろう。店主は首を横に振った。
「いや、そんな患者はいなかったですよ。ただ、ここ最近、街で腕や足がかぶれたように、発疹を起こす患者が増えてますがね。ほれ、こんな風に」
店主は袖を持ち上げて、細い腕を見せた。その腕は確かに赤い発疹ができている。
「ちょっと失礼」
アキレアは店主の腕をとって、発疹を色々な角度から眺めた。
「痛ててて」
店主が声を上げたのは、アキレアが店主の腕をひねったからだ。かなり痛かったのだろう。店主は少し涙目になっている。アキレアは謝って、店主の腕を離した。
店主が恨みがましい視線をおくってくる。アキレアはもう一度謝った。
「悪かった。で、店主。ここに、クラシギルの粉末はあるか？」
唐突な話の転換に、店主は一瞬呆気にとられた顔をした。
「はあ、ありますが」
アキレアは、その答えに満足の笑みを見せる。
「なら、それを貰おう。あと、生水は飲まないほうがいいだろう。必ず一度沸騰させてから飲むことだ。そうすれば、その発疹が出る患者は次第に少なくなるはずだ」
アキレアの言葉に、半信半疑な顔をした店主は頷いて見せ、クラシギルの粉末を取りに、店の奥へと入っていった。

アキレアはクラシギルの粉末を買い、薬屋を後にする。
しばらく、大通りを進む。

時折あちらこちらから、食欲をそそるよい匂いが漂ってくる。空を見上げると、日は中天に差し掛かろうとしていた。
昼食の時間だ。
一度屋敷に戻ろうか。そんなことを思っていると、近くの店の中から威勢のいい声が聞こえてきた。
「なんで、パン一個が二十ルクもするんだよ。この間まで、五ルクで買えたじゃないか」
そっと、店を覗いてみる。全体的に薄汚れた小さな子どもが、女主人に食ってかかっているところだった。
子どもの年の頃は、十を過ぎるかどうかといったところか。
「おだまりっ。値上げしたんだってさっきから何度も言ってるだろう。最近は小麦の値が上がってるんだ。五ルクじゃ、こっちは商売あがったりなんだよ。文句があるなら余所の店に行くんだね」
「そんな、この街じゃパン屋はここしかないじゃないか。オレに飢え死にしろっていうのかよ。せっかく給金入って、やっとまともな食い物にありつけると思ったのに」
なおも噛みつくように言った子どもに、恰幅の良い女主人は腰に手をあてて言い返した。
「うるさいよっ。そんなこと知ったこっちゃないね。さあ、さっさと出てお行き。あんたみたいな汚い子どもにいられちゃ迷惑なんだよ」
言葉の途中で、女主人は子どもの服の後ろ襟を掴んで、店の外へ放り出した。
アキレアの見ている前で、子どもは勢いよく道に尻もちをついた。女店主は手を叩いて、鼻を鳴らすと店内に戻っていく。
その背を見つめていた子どもが、不意に立ち上がった。アキレアがどうするのかと見ている前で、子どもは大きく息を吸うと、女店主に向かって大声で罵詈雑言をまくしたてた。そして、女主人が怒って店を出てくる前に走りだす。その逃げ足の速いことといったらない。

つい、一部始終を見てしまったアキレアは、手に箒を持って店から出てきた女店主と目が合った。怒りの形相をしている女店主に、アキレアはとりあえず意味もなく笑って見せた。

たくさんのパンが入った袋を手に、アキレアは歩いていた。屋敷の方向から少しそれた森の中である。

アキレアは途中、たまに足を止めては草や木に手をやり、頷くとまた歩きだす。

しばらく道なき道を進むと、開けた場所に出た。その少し先に小川が見える。その小川の近くに、先ほどパン屋にいた子どもの背が見えた。膝を抱えて座っているようだ。

アキレアはその子どもに向かって、声をかけた。

「やあ、一緒にパン食べないか？」

その声に驚いたのか、子どもは素早い動作でこちらを振り向いた。胡散臭いものを見る目つきである。

「あんた、さっきパン屋の前にいた奴だな」

アキレアは頷いた。子どもは、ふんっと鼻を鳴らし、視線を小川の方へ戻した。

アキレアはゆっくりと、子どもに近づき、その隣に腰を下ろす。子どもは少し身動きし、アキレアから距離を取るように体をずらした。アキレアはその分距離を詰める。その動作を互いにしばらく繰り返した後。子どもが業を煮やしたように声を荒げた。

「もう、何なんだよ」

アキレアは顰め面の子どもに、笑顔を向けた。

「おい、どうだ？　食わないか」

先ほど買ったパンを袋から取り出し、まだ温かいそれを子どもの前に差し出した。子どもは一度視線をパンへと落とし、振り切るように頭を振って、アキレアを睨んだ。

「同情なんていらねぇよ。あんたが買ったんだろ。あんたが食えよ」
顔を背けた子どもの腹から、大きな音が鳴った。体は正直だ。
「べ、別に腹減ってるわけじゃないからな」
慌てたように言った言葉に被さるように、また腹の虫が音を立てる。アキレアのパンを持つ手が震えた。笑いだしたいのを我慢した為である。そんなアキレアの様子に気づいたのだろう。子どもは、深い緑色の大きな瞳を細めた。
「何、笑ってんだよ」
恥ずかしさが、声に滲みでてしまっている。アキレアはとうとう笑いだした。しばらくして、子どもに睨まれていることに気付き、なんとか笑いをおさめる。
アキレアは取り繕うように、咳払いして、笑顔をつくった。
「わるかった。でも、よかったら一緒に食べてくれないか？　俺は一人で食べるのが好きじゃないんだ」
子どもは、何かを図るようにアキレアをしばらく見つめた。そして、アキレアの差し出したパンを無言で掴み取り、口へ運んだ。
「悔しいけど、美味いや」
「そうだな。味は悪くない」
アキレアは早々に食べ終えた子どもに、二つ目のパンを差し出した。今度は素直に受取って、子どもは熱心にパンを口へ運ぶ。余程腹が空いていたらしい。二つ目のパンもすぐに食べ終え、アキレアは三つ目のパンを差し出した。
なんだか、小鳥に餌付けしているような気分だ。そう思って、頬が緩む。
「何、ニヤついてるんだよ。気持ち悪いおっさんだな」
「おっさんはないだろう。せめてお兄さんと呼んでくれないか」
「お兄さんってな柄じゃないくせに……あんたパッと見、どっかのゴロツキみたいな顔してるもんな。でも、あんた、領主さまの客人だろ？　町のみんなが噂してたぜ。なんとかマスターって言うんだってな。偉い人なんだろ？」

知っていたのか。そう思って、アキレアは子どもを見つめる。先ほど、薄汚れた子どもだと思ったが、薄汚れたではなく、かなり汚れた子どもと言った方が正しいだろう。身につけている服は泥まみれで、ところどころに穴があいているし、その服に負けず劣らず、小麦色の肌や茶色い髪にも土汚れがついている。

「なあ、聞いてんのかよ」

焦れたような子どもの声に、アキレアは我に返った。

「ああ、聞いてるよ。俺はなんとかマスターではなくて、フラワーマスターだ」

「ふーん」

子どもは、分かったような分からないような顔で頷いた。

「お前も、仕事をしているんだろう？　パン屋で給金をもらったとかなんとか言ってたよな」

「まあね。領主さまのご厚意で働かせてもらってんだ。あそこのお屋敷にある薬草園で薬草の世話をしてる」

「そうか。そのせいもあって、このあたりの草木はお前を好意的に思ってるんだな」

「は？」

子どもの不思議そうな様子に構わず、アキレアは言葉を続けた。

「それから、お前の汚れている訳もそのせいか」

「うっ」

子どもは小さく呻くと、ばつの悪そうな顔をする。

「さて、せっかく友達になったことだし、お前をお茶に誘うことにしよう」

「いつ、友達になったんだよ！」

驚いた顔をする子どもに、アキレアは片目をつぶって見せる。

「おいしいお菓子も用意する」

「え？　本当か？」

お菓子という言葉に、嬉しそうな声を上げた子どもに、立ち上がって手を差し出す。

「もちろんだ。もう少し話も聴きたいしな」
そう言って、アキレアは微笑んだ。子どもは、差し出されたアキレアの手に、その小さな手を重ねた。

第五話　カボックの憂鬱

案内人によって、森の中を散々歩かされたカボックは、夕刻にやっとその身を解放された。確かに、王都ではお目にかかれないような、珍しい草花もあった。あったが、普段は、室内で研究に明け暮れているカボックにとって、山歩きは過ぎた運動であった。

疲れた足に鞭うつように、カボックは屋敷の階段を上がり、師匠の部屋のドアをノックした。

返事を聞いてドアを開けると、不意に異様な臭いを嗅いだ気がして、カボックは慌てて開いたドアを閉めた。

「カボック、どうかしたのか」

首を傾げていると、ドアの向こうから、アキレアの声が聞こえてきた。カボックはドアと向き合い、大きく深呼吸すると、もう一度ドアを開ける。

やはり、臭い。何か酸っぱいような、腐ったような臭いが、部屋に漂っている。

カボックはアキレアへのあいさつもそこそこに、鼻を動かし、その臭いの元をたどった。そして、臭いの元凶を発見する。

臭いの元凶はおいしそうに、カボックが王都から持ってきた菓子を食べていた。

「な、だ、誰です？　あなたはっ」

「そう言うあんたこそ誰だよ」

指を突き付けたカボックに、指を突き付けられた相手は生意気にも言い返してきた。カボックはその相手から眼をそらし、眦をあげて師匠を見る。

「マスター。また、拾って来たんですか？　何でもかんでも拾ってこないでくださいっていつも言ってるじゃないですかっ」

「カボック。落ち着け。この子は拾って来たんじゃない。友達になったんだ」

「友達？　友達ですって！　はっ。全く、いらっしゃい」
言葉の途中で、カボックは子どもに近づいたかと思うと、子どもの細い腕を掴んで引っ張った。大人の力にかなうはずもなく、あっさりと子供は立ち上がらされる。持っていたお菓子のかけらが床に転がった。
抵抗空しくドアまで引っ張られた子どもは、大声を上げた。
「何だよ、オレを追い出そうってのか？」
「違いますっ」
カボックは一度立ち止まり、冷たい眼で子どもを見下ろした。
「洗うんです」
「は？」
子どもには瞬時に意味が理解できなかったようだ。一瞬抵抗をやめた子どもを引っ張って、カボックは部屋を出て行った。
子どもが我に返ったのだろうか。子どもの大声と、それにこたえるカボックの声が廊下から室内へ届く。
その声がどんどんと遠ざかっていく。
一人残されたアキレアは、さて、どうしようかと机に目をやった。
カボックを止めるつもりはない。そう乱暴なことをしやしないだろう。
アキレアは子どもに出した菓子の残りを目にし、それを一つ取ると口に運んだ。
「うん、美味い」
カボックが王都から茶請けにと持ってきた菓子だ。あとで勝手に菓子を出したことを謝らないとなぁと、アキレアは思うのだった。

しばらくすると、カボックはやけにさっぱりとした子どもを連れて戻ってきた。
「おまえ、金髪だったんだな」

アキレアは驚いたように切れ長の目を見開いた。先ほどの汚れた子どもと同一人物とは思えない。茶色っぽい肌は、白くなり、茶色だと思っていた髪は綺麗な金髪になっている。いったいどんな魔法を使ったのかと疑いたくなるほどの、変わりようだった。これでもう少し質の良い服を身に着けていれば、貴族の子息だといっても誰も疑わないだろう。

「そうだよ。気づかなかったのか」

アキレアの声に、胸を張って子どもは答えた。その大きく澄んだ緑の瞳は先ほどと変わらない。その頭を軽く叩いて、カボックは言う。

「偉そうにしない。この方はフラワーマスターですよ」

「痛ったいなぁ。そんなのオレ関係ねぇし」

叩かれた頭に手をやって、子どもがカボックを睨むように見上げた。

「まあまあ。二人とも、お茶はどうだ？」

先ほど、屋敷の使用人に用意してもらった茶を二人に進めると、二人は席に着いた。

「それにしても、どうやったらあんなに汚れるんです？　まるで何日も洗ってないと疑いたくなるくらい、汚れが出てきましたよ」

カボックがお茶を一口飲んで息をついた後、子どもに尋ねた。子どもは大きな緑の瞳を上げ、カボックに顔を向ける。

「そりゃ、だって。何日も洗ってないもん。どうせ汚れるんだから、洗ったって一緒だろ？」

子どもがその言葉を言い終わるや否や、カボックはその髪と同じ茶色の眉を吊り上げた。

「何を言ってるんです。体を洗うことは大事なことですよ。どうせ汚れるから、なんて理由で体を清めないとは何事ですか。いいですか、不潔にしているとそのうち頭に虫がわきますよ。虫ですよ、虫。ああ、考えただけで気持ち悪い。それに虫だけではありません。不潔にしていると、病気にもかかりやすくなるんです。そもそも……」

カボックの説教は始まったら長い。子どもは目を白黒させている。おとなしく聞いているように見えるが、その実、内容はたいして頭に入っていないだろう。カボックのいつまでも続く言葉に呆気にとられているだけの様に、アキレアには見えた。
「カボック、カーボック。そのくらいにしないか」
「ですが、マスター」
カボックが不満の声を上げる。アキレアは苦笑いで子どもを示した。
「それ以上言ったところで頭に入るとは思えないぞ」
子どもは今や心ここにあらずといった感じである。カボックは放心した子どもの様子に気づいて、溜息をついた。
「しょうがないですねぇ。はいっ」
掛声とともに、カボックは子どもの顔前で手を打った。
子どもははっとしたように瞬く。
「うおっ。びっくりした」
体を一瞬震わせたところを見ると、本当にびっくりしたらしい。カボックはその子どもの様子に肩をすくめて見せた。
「あんた、すっげー舌回るなー。オレ、感心した」
子どもは、緑の大きな目をきらきらさせている。
「そんな、妙なところを感心されても」
カボックは脱力した声を出すのだった。
「服も着替えたんだな。えっと……あれ？　そう言えば、名前聞いてなかったな」
子どもに向かって、声をかけたアキレアは、今更ながらに、名乗りあっていなかったことに気づく。
「服は、この人が用意してくれたよ」
子どもは、隣に座るカボックを見上げる。
「この人ではなく、カボックと呼んでください。それにしても、マスター。名乗りあってもいないなんて。友達だとおっしゃったくせに」

「カボックは、いちいち細けーな」
子どもが、茶請けの菓子を頬張りながら言うと、カボックはその子どもの頬を笑顔で引っ張った。
「年上の人には、さんをつけなさい。さんを。はい、言ってごらんなさい。カボックさん」
「ヒャ、ヒャボックしゃん」
頬を引っ張られているため、発音は怪しかったが、カボックはよろしいと頷いて、頬を引っ張っている手を離した。
「もうっ。痛ってーなー」
引っ張られた頬を片手でさすりながら、恨みがましい眼でカボックを見る。
カボックは素知らぬ顔で、お茶を飲んだ。
「で、だ。名前は？」
アキレアが再度尋ねると、子どもは頭を掻いた。
「んーっと。なんかいっぱいある」
その答えに、アキレアとカボックは顔を見合わせた。
「いっぱいって？」
アキレアが代表して聞くと、子どもは屈託のない顔で答えた。
「えっと。オマエでしょう。ガキとか、コレとか、ソレとか、コドモとか、あ、領主さまにはキミって呼ばれた」
指折り数える子どもは、純粋にそれが名前だと思っているようだ。アキレアとカボックは何ともいい難い表情でお互いを見た。
「ほ、他にもあるでしょう。もっと、そう、ご両親がつけてくれた名前が」
「え？　オレ、母さんはいなかったし、父さんはオレがちっさい時にどっかいっちゃったから。覚えてない」
アキレアと、カボックは複雑な顔をする。
「近所のおばちゃんが亡くなるまでは、ごはんとかくれたんだけどさ。あ、おばちゃんには、ボウヤって呼ばれてた」
それも、名前じゃないよ。と、アキレアとカボックはほぼ同時に

思ったが、どちらも言葉には出せなかった。
子どもは、大人二人の雰囲気がおかしくなったことに気付いたのだろう。眉をよせて、怒ったような口調で言った。
「なんだよー。何で、そんな変な顔してるわけ？」
アキレアとカボックは顔を見合わせた。三度目である。
「いや、あんまり名前が多くてびっくりしてたんだ。どれも、まあ、いいかもしれないけど。そうだな。俺が一つ、名前を付けてやろうか」
その申し出に、一番驚いたのは、子どもではなく、カボックであった。
「な、ま、えぇー？　本気ですか？」
「名前って言いたかったのか、驚きの表現だったのか、どっちだ」
アキレアのずれた問に、カボックは眉を吊り上げた。
「そんなもの、どっちでもいいです。どっちでもいいんですよっ。本気なんですか？　この子の名付け親になると？」
アキレアはカボックに肩をすくめて見せた後、子どもに視線を向けた。
「どうする？　つけてやろうか？」
子どもは、じっとアキレアを見つめた。アキレアも子どもの澄んだ緑の瞳を見つめ返す。
しばらく見つめあったあと、子どもはゆっくりと口を開いた。
「いいよ。でも、変なのはダメだからな」
「……ダメなのか」
小声で呟やかれたアキレアの声に、子どもとカボックは、変なのつける気だったなと思った。
アキレアは腕を伸ばすと、子どもの頭に手を置いた。
「明日、またおいで。その時までにいい名前考えておくから」
その言葉に、子どもは嬉しそうな笑顔をアキレアに向けた。

第六話　願いの行くへ

今日も素晴らしい夕食を堪能したアキレアとカボックは、昨日と同じく食後のお茶をブラシカ卿とともに楽しんでいた。

ブラシカ卿は元来穏やかな性格なのか、気取る事もなく、アキレアたちの旅の話を熱心に聞いていた。

話の隙間。ふと、何かを思いついたように、アキレアがブラシカ卿に尋ねる。

「そう言えば、ブラシカ卿。こちらに、アネモーネ公爵夫人がいらしたことがあると伺いましたよ。旅に出る前に婦人にお会いする機会がありましてね。こちらに伺うことがあったら、よろしく伝えてくれと」

ブラシカ卿は一瞬驚いた顔をした後、微笑んで頷いた。

「ええ、覚えていますよ。こちらに来られた頃は、まだ、アネモーネ公爵夫人ではありませんでしたけどね。とてもお綺麗な方でしたから、忘れろったって忘れられません」

その言葉に、アキレアも頷く。カボックも公爵夫人とは何度か会っているので、大いに頷いた。

「ところで、今日はどうでした？　案内人は役に立ちましたか」

不意に、ブラシカ卿が言った。話を向けられたカボックは、慌てて口に含んだばかりのお茶を飲み下して、カップを置いた。

「はい、王都では見られない珍しい花々をたくさん見ることができました。ブラシカ卿には感謝しております」

感謝の意を伝えると、お役に立てたのならよかったとブラシカ卿は微笑む。

「そう言えば、ブラシカ卿。この屋敷には薬草園があるとか。ぜひ一度拝見したいのですが」

アキレアが言うと、ブラシカ卿は一度、眉を顰めた。だが、すぐにいつものやわらかな表情が戻ってくる。

「ええ、ありますが。誰に聞いたのですか」
「街で少し小耳にはさみまして」
アキレアは笑顔を返す。
「そうですか。薬草園といっても、たいしたものはないのですよ。フラワーマスターにお見せするような代物ではありませんが、それでよければ。どうぞ、ご覧になって下さい。場所は使用人に聞けばわかりますから。では、私はこれで。貴重なお話をありがとうございました」
そう言って、ブラシカ卿は席を立った。それに合わせてアキレアたちも席を立つ。
部屋に戻ると、カボックはアキレアに問いかけた。
「マスター。いつの間にアネモーネ公爵夫人にお会いになってたんです？　どうせ行くなら、私も連れて行ってくださったらよかったのに」
アネモーネ公爵夫人の美しさは万人が認めるところだ。彼女はカボックの憧れの女性なのである。
「まあ、ちょっとあってな。お前がいないときに呼ばれたんだ。仕方ないだろう」
まあ、そうですけど。と、カボックは拗ねたような声を出した。
「カボック。これを」
アキレアは服の隠しから何かを取り出して、カボックに放った。カボックはそれを慌てて受け止める。小さな、紙に包まれたものであった。それを開くと、中には白い粉末が入っている。それを指につけて舐めたカボックは、変な顔をした。
「これ、クラシギルじゃないですか。どうしたんです？　これ」
「カボック、お前井戸の水飲んでないか？」
「飲んでないとは思いますけど」
山に行く時に用意された飲み水が、井戸水かどうかは分からない。
「とりあえず。保険だ。それ、飲んでおけ」
「どういう意味です？　何か分かったんですか」

カボックは表情を改めて、師匠を見た。
アキレアは、頷くと、椅子に腰かける。カボックにも椅子をすすめ、カボックが席に着いたのを見計らって、口を開いた。
「今街で、腕や足に赤い発疹ができる奇病が流行っているらしい」
カボックは、アキレアの言葉に考えるような顔をした。
「カボック。ケンム草の一般的な呼び名と、その特徴は？」
尋ねられて、カボックは眉間に皺をよせた。その割にはさほど間をおかずに、口を開く。
「カワリミ草です。西の地方にはどこでも咲いているような花ですよね。自然に咲いているときは害のない花ですが、一度光の極端に少ない場所に移すと毒素を作り出します。花弁や茎を口に含むと幻覚作用が起こり、根を触ると……」
そこまで言って、カボックは目を見開き、あっと声を上げた。
アキレアはよくやったと言わんばかりの笑顔で頷く。
「そうだ。根には炎症を引き起こす刺激物質がある。町での奇病と引っかかるところがないか？」
「同じように、腕や足に炎症を起こしている患者が増えているってことですよね。それは、ケンム草が関係している可能性が高いってことなんでしょうか」
カボックの問いかけに、アキレアは頷いた。顎に手をやってつまむような動作を二、三繰り返し、ようやく口を開く。
「山や森にもケンム草が毒素を持つような条件下の地はなかった。なら、日差しをあてず、なおかつ、他人に見られずに栽培する場所は地下にしかない。地下に植えられたケンム草の根から、炎症を引き起こす刺激物質が地下水に漏れ出している可能性が考えられる」
アキレアの言葉に、カボックは感銘したように頷いた。
「さすが、マスターです。刺激物質を含んだ地下水を飲んで、街の人たちは炎症を起こしてしまったってことなんですね。いままで回ってきた街や山や森では、そう言ったケンム草に関係しそうな事案はなかったですものね。これは可能性大ですよ、マスター」

喜びの声を上げたカボックの前で、アキレアは腕を組んだ。
「さて、カボック。そろそろその薬、飲みなさい」
カボックの表情が固まる。カボックはさりげなく、机の端に置いていた薬を見た。
「あの、本当に、飲まないといけませんか」
恐る恐るといった風に、カボックが尋ねる。
「いけません」
完結なアキレアの答えにカボックは項垂れた。クラシギルは主に毒消しとして用いられる薬である。炎症を抑えることもできる薬で、飲んでいて損はない。損はないが……。
「ですが、マスター。この薬苦いんですよ。この上なく苦いんです」
「知ってるよ」
さっき俺も飲んだしなと、アキレアは言う。カボックはさらに項垂れた。
「薬は、飲むより研究する方が好きなんですが」
薬に手を伸ばしたものの、往生際悪く薬を手で弄びながらそう呟いたカボックの耳に、アキレアの声が届いた。
「カボック、くどいぞ？」
ああ、怒ってらっしゃる。
カボックは悟って、顔をひきつらせた。そっとアキレアを見ると、笑顔なのに黒い双眸が据わっている。
カボックは、白湯を貰ってきますと言い残し、一目散に部屋から逃げ出した。

第七話　薬草園

翌日は少し雲のある空だった。雨が降らなくてよかったと、子どもは思う。水のたくさん入った桶を抱え、子どもは先を急いだ。

領主の館の敷地内。背後の森に少し入ったところに彼の仕事場、薬草園がある。

昨日出会ったフラワーマスターという男と、その弟子の青年に今日も会う約束をしている。そのため、一日に二回と決められている水やりを、少し早めにすることにしたのである。

いつもの通り、薬草園に入ると、薬草園の真ん中にある大きな白鳥の像の前に立った。

一度、持っていた桶を置いて、子供はその白鳥の像を押した。その押し方には少しコツがある。普通に押したのでは動かないそれを、いつもの手順で力を加え押していく。

像は音を立てて、ゆっくりと動いた。ある程度動かすと、その下に黒い穴が姿を現す。穴をよく見ると、地下へと続く階段があることが分かるだろう。子どもは桶を再び抱えなおすと、その階段を下りて行った。

桶を置くと、一度地上に戻り、灯りを手にもう一度地下へ下りる。地下へ下りると、開けた空間が待っていた。灯りをいつもの場所において、子どもは地下いっぱいに植えられた白い花を見る。

「おはよう。ごはんだよー」

子どもは花に笑顔で声をかけると、水をまく作業に入った。

けっこうな時間を有して、水まき作業を終える。子どもは一息つくと、しゃがんで花に手をやった。

「えへへー。昨日さ。変な大人二人に会ったんだー。なんか、オレに名前つけてくれるんだって。どんな、名前にしてくれると思う？」

子どもは一度口を閉じて、じっと花を見つめる。物言わぬ花だが、花を眺めていると、心が温かくなるような気がするのだ。

白く、少し大きめの花ビラを親指と人差し指で挟んでなでると、子どもは再度口を開いた。
「実はさー。前にも、同じように俺に優しくしてくれた人がいたんだー。その人もオレに名前つけてくれたんだけど、もう忘れちゃったんだよね。だから、次は絶対忘れないようにするんだ」
そう言って、子どもは膝に手をついて立ち上がる。灯りと桶を持って地上へ続く入口へ向かった。
「じゃあ、また後でね」
振り向いて、植えられた花々に手を振ると、子どもは今度こそ地上へ上がるべく、階段に足を乗せた。

地上へ出る階段を登る途中で、子どもは異変に気付いた。いつもなら、そろそろ地上の明かりが見えるころだが、いつまでも明かりが見えてこない。子どもは階段を駆け上がった。しばらくして立ち止まる。立ち止まったのは、これ以上先に進めなかったからだ。子どもは灯りを掲げて、気づく。
入口が閉まっている。誰かが白鳥の像を動かしたのだ。入口をふさいでいる石像を叩いたり、押したりしてみるがびくともしない。とりあえず、誰かいないか呼びかけようと子どもは口を開いた。
その時、外から思いがけず声が聞こえたような気がして、子どもは唇を閉ざし、耳を澄ました。
「特に、変わったところはありませんねぇ」
子どもに耳に、微かな声が届く。やはり外に誰かがいる。その声には聴き覚えがあった。昨日出会った、舌の良く回るカボックだろう。
「ああ、手入れもそれなりにされているようだが……」
答える声は、フラワーマスターのものに違いない。

「地下室があるような感じもしませんし。やはり、屋敷の下に密に地下室が造られているとか。ああ、でも昨夜もさんざん捜しましたものね」
また、カボックが言った。
彼らは地下室を捜しているのだろうか。今、ここに地下室があると知ったら、彼らは喜ぶだろうか。
そう考えて、子どもは首を横に振った。この地下室のことは誰にも話してはいけないと言われている。
「いや、この下にあるはずだ」
「……勘、ですか？」
カボックの問いかけに、フラワーマスターが答えた。
「いや、確信だよ」
僅かな間をおいて、カボックの声が耳に届く。
「そうですか。マスターがそうおっしゃるならそうなんでしょうね。この下に王都を騒がせた魔性の花があるんですね」
子どもは唾を飲み込んだ。
魔性の花？　どういう意味だろう。
この下にある花は、人の役に立つ薬草ではなかったのか？
胸の鼓動が速くなる。知らず桶を抱えている手に力を込める。
「麻薬の栽培に手をかけるなんて、あの温和なブラシカ卿が。信じられませんね……」
カボックの声はまだ続く。
子どもはそっと、足を後ろへ下ろした。踵を返し、音をたてないように降下する。ある程度の距離を下ると、駆けだした。走って地下へ辿り着くと、足を止める。耳障りな息遣いが地下室に響く。
僅かな灯りの下、白い花がむせかえるような芳香とともに、子どもを出迎えた。

第八話　名前

今より、ずっと小さな頃。
一人、小川の前に座って泣いていたあの日。
子どもは妖精にあった。本当に妖精だったのかは分からない。
まるで妖精のように綺麗な人だった。名前の知らないあの人を、子どもは妖精と呼んでいる。
その妖精はあの日、美しい金色の髪をなびかせて、森の奥からふいに現れた。
子どもに気づいた妖精は、まるで花が咲くような笑顔で子どもに声をかけてきた。
『どうして、泣いているの？　よかったら、一緒にお話ししましょう』
妖精は子どもに手を差しだした。白く華奢なその手に、子どもはゆっくりと小さな手を重ねた。
そして、その日。子どもは夢のようなひとときを過ごすことになる。

満天の星が空に輝く。優しい月明かりが、暗い森を照らしていた。
ゆっくりとした流れの小川に、大きな月が少し歪んで映っている。
「ああ、またここにいた」
草をかき分ける音とともに、低く穏やかな声が背後から聞こえてきた。子どもはゆっくりと振り返る。
そこには、昨日会ったフラワーマスターがいた。黒髪に黒眼の彼は、服が白っぽい色でなければ、夜目には見えにくい。
彼はゆっくりとした足取りで木々の間から出てくると、子どもの隣に腰を下ろした。まるで、昨日の昼間の再現のように。

だが、今日はパンを持ってはいないようだ。昨日は彼が近づくにつれて、空腹を刺激する良い香りが漂ってきた。
「今日は何で来なかったんだ？　せっかくカボックがお菓子を焼いて待ってたのに」
「え？　本当か！」
お菓子という言葉に、思わず食いついてしまい、子どもは慌てて、フラワーマスターから顔を背けた。
「何で、来るんだよ。そうだ、昨日も。どうしてオレがここにいるって分かったんだよ」
話を逸らそうと、子どもは声を上げた。フラワーマスターは、微笑みを子どもに向けると、体を少しひねり背後に目をやった。
「教えてくれたんだよ」
子どもはつられて背後を見て、首をかしげた。背後には誰もいない。草や木々が時折吹く風にあおられて、葉擦れの音を響かせているだけだ。この時間には、鳥の鳴き声さえも聞こえない。
「誰が？」
「この森が」
「え？」
子どもは背後からフラワーマスターの顔に目を向けた。
「森の木々が教えてくれたんだよ。お前はこの辺でよく遊んでいるらしいな」
真意を探ろうと、子どもはしばらくフラワーマスターを見つめた。謀られているのかと疑ったのだ。
だが、ん？　と、首をかしげたその顔は、とても偽りを言っているようには見えない。
「なあ、本当に、木に聞いたのか？　オレがどこにいるか。木が教えてくれたのか？」
本当なのかと、何度も問う。
「ああ、忘れたのか？　俺はフラワーマスターだぞ」
言われてそういうものなのかもしれないと、納得しそうになる。

「でも、オレ、木が喋ってるとこなんて見たことないし」
子どもの言葉に、フラワーマスターはその大きな手を伸ばし、近くに生えていた草に触れる。
「感じるんだよ。こうやって、手を添えて。木や草花の声を感じ取るんだ。お前だって、薬草園で、薬草の世話をしているんだろう？気持ちが通じたって思うことないか？」
問われて、思う。あの地下室の花々のことを。白く可憐で綺麗な花。いつも話しかけていた。寂しい時や、辛い時。癒してくれる存在だった。
「うん。でも……」
子どもは、昼間聞いた、フラワーマスターとカボックの会話を思い出した。地下で育てているあの可憐な花が、実は麻薬になるのだと。
麻薬は、人に害をなすものだという知識はあった。それが、どう人に害を及ぼすのかは分からなかったが、悪いものであるということは知っていたのだ。
そして、その悪いものを自分は育ててしまった。それをこのフラワーマスターは咎めに来たのだ。
遠い、王都から。
せっかく、優しくしてくれたのに。
子どもの目に、知らず涙が溜まる。
急に黙ってしまった子どもを何と思ったのか。しばらく子どもを見つめていたフラワーマスターは、不意に声を上げた。
「そうだ、名前。決めたぞ」
「え？」
唐突な言葉に、つい顔をあげる。子どもの目に、涙が溜まっていることに気付いたのだろう。フラワーマスターは子どもの頬に手をあて、親指で子どもの目に溜まった涙をぬぐった。
「お前の名前は、シオンだ。どうだ？良い名前だろう」
シオン。子どもは数度胸の中でその名を口ずさむ。

そして、その名の響きに引っ掛かりを覚えて、記憶を探る。いつか、どこかで聞いたような気がする。しばらく、目を瞑って考えていると、唐突に記憶がよみがえってきた。
「あっ、あの人もオレのことそう呼んだ」
「誰？」
問われて、子どもは口にする。
「ずっと前にここで会った妖精に」
「妖精？」
子どもは頷いた。そう、丁度この場所で泣いていた時に会った、あの綺麗な妖精。
名がないと不便だと、妖精がつけてくれた名がシオンだった。名をつけてくれた時、どこか悲しげな表情をした妖精の顔が、シオンの脳に鮮やかに蘇る。
あの妖精は、別れる間際この小川の近くに群生している小さな藍色の花を摘んで、子どもに手渡した。
誰かに花を貰うのもはじめての体験で、子どもはとても嬉しかったのをよく覚えている。あの時、妖精が言った一言が、今でも頭に強く残っていた。
『泣きたくなったら、この花を思い出しなさい。きっと悲しみを吸い取ってくれるから』
そう言って、妖精はいなくなった。
「妖精は、オレが淋しくないように一緒に遊んでくれたんだ。オレが独りだっていったら、ギュっってしてくれた。すっごくいい匂いがして、こんな人がオレのお母さんだったらよかったなって思ったんだ」
言いながら子どもは顔を俯けた。たった一度遊んでもらっただけだが、子どもには忘れることの出来ない良い思い出だ。
「なあ、もしかして、その名前。妖精に聞いたのか？」
ふと、思いついて子どもは尋ねた。
「さあ、どうだろうね」

うそぶくフラワーマスターに、子どもは詰め寄る。木と話ができるくらいなのだから、妖精とだって友達かもしれないではないか。そんな思いが子どもに湧きあがる。
「教えろよ」
「なら、シオン。お前が先に教えてくれよ。どうして、約束したのに屋敷に来なかったのか。どうしてさっき、泣きそうになっていたのかを。そうしたら教えてやるよ」
言われて、子どもは俯いた。また、あの白い花が頭に浮かぶ。人のためになる薬草だと聞いていたのに、人を害する花だったなんて。
「シオン？　どうした。何を泣く？」
聞かれて、子どもは気づいた。自分の瞳から涙が流れていたことに。
流れる涙を拭うこともせず、子どもは顔を上げた。
「ごめんなさい。オレ、知らなかったんだ」
そう言うと、子どもはフラワーマスターに抱きついた。一瞬、驚いたようだったフラワーマスターは、そっと子どもの背を宥めるように撫でた。
その温かい手のぬくもりに、なぜか余計に涙を誘われて、子どもはしばらくの間、泣き続けたのだった。

深夜。寝室から出てきたカボックは、アキレアに肩をすくめて見せた。
「すっかり熟睡してますよ」
「そうか」
どこか安堵の響きをにじませて、アキレアは呟いた。カボックはアキレアの座る席の向かいに腰掛ける。
「まったく、いたいけな子どもに嘘を言って、ケンム草の世話をさせていたなんて。あんな紳士面して、よくそんな卑劣なことができ

たものですよね。あー、腹の立つ。腹が立ち過ぎて眠気も吹っ飛んでしまいましたよ」
鼻息も荒く、カボックはそう言い捨てる。そんな弟子に、アキレアは苦笑を浮かべてみせた。
ようやく泣きやんだ子どもを屋敷へ連れ帰り、アキレアはカボックとともに、子どもから事情を聞いた。
どうやら、予想していた通り、領主がケンム草の栽培をさせていた張本人らしいと知れた。
さて、どうしたものか。
そう思っていると、カボックの声が耳に入ってくる。
「まあ、それはそれとして。マスター。あの子の名前、どうせ花の名前にするなら、もっと他にもいい名前があったでしょうに。もっと良い花言葉の花の名前とか。どうしてシオンなんですか」
カボックは不満げだ。アキレアはカボックに、口元に笑みを浮かべてみせた。
「最初から、そう決まっていたからだよ」
どういう意味ですか？　と、カボックが問う。だが、口を開いたアキレアは、問の答えとは全く違う言葉を口にした。
「さあ、そろそろお仕置きの時間といこうか」
「え？　今からですか」
驚きの声を上げた弟子に、アキレアは言う。
「そう、今からだよ」
アキレアの顔に笑顔はなかった。

第九話　お仕置きの時間

つい先ほど、収穫を終えたケンム草は、無残な姿をさらしていた。それを見て、男は一人ほくそ笑む。

王都に住む馬鹿な貴族たちは、この花に感興し、無様な姿をさらすことだろう。

花びらを、酒を満たしたグラスに浮かべ、それを飲む。甘い幻想を見ることができるとして、もてはやされているこの花。

甘い幻想が、どんな犠牲を生むかも知らずに。

これでまた、大金が手に入る。王都へ出るための金が確実に貯まっていく。

こんな西の辺境の地で終わるつもりはなかった。今の地位に満足などしていない。

男は、ゆっくりと足を入口の方へ向けた。

「もう、お帰りか？　ブラシカ卿」

暗い地下室に、低い声が響き渡った。その声は男の背後から聞こえてきた。入口とは正反対の場所から。

先ほど、花を収穫に来た男たちは、全員この部屋から出て行ったはずだ。

ブラシカはゆっくりと振り返った。頭には、彼の名を呼んだ男の顔を思い浮かべながら。

灯りを掲げると、黒髪に黒眼の男が目に入ってきた。

「おや、マスターデュオン。こんな夜更けにどうされたのです？」

穏やかな声でそう問う。男は静にゆっくりと近づいてくる。

「驚かれないのですね。私がどうしてここにいるのか。不思議には思わなかったのですか」

フラワーマスターの問いに、ブラシカは微笑みを見せた。

「ええ、思いましたよ。マスターデュオン。どうやって、この部屋へ入ってこられたのですか？　入口はここなのに」

薬草園へと続く階段を見上げたブラシカに、フラワーマスターも笑顔を見せる。
「部屋の奥に、抜け道があるのですよ。あなたがこの花たちの世話役にと頼んだ子どもが教えてくれました。私には少々狭い抜け道で苦労しましたが」
苦笑交じりにそう言って、視線を花が摘み取られたケンム草へと向ける。
「この花が、どういうものか。知っておられるのでしょう？　ブラシカ卿」
フラワーマスターの目に暗く冷たい光が宿る。ブラシカはゆっくりとした歩調で、ケンム草の植えられたところまで来ると、それを見下ろした。
横に並ぶように立ったフラワーマスターに、聞こえるように声を出す。
「ええ、もちろん。この花は今や、貴族の愉しみの一つとなっている。私はその愉しみに一役買っているという訳ですよ」
「その愉しみが、人を害すると分かっていても？」
「甘い夢を見られるのだから、それくらいの危険は覚悟の上でしょう」
「提供する側に罪はないとでも？」
フラワーマスターの言葉に、ブラシカは可笑しげに笑い声を上げた。
「ははは。ケンム草を育ててはいけないという決まりはない。私は何も罪を犯してはいないのですよ。マスターデュオン。私はただ、花を育てて売っただけだ。あなたは私を裁けはしない。あなたは、一介のフラワーマスターに過ぎぬのだから」
挑戦的な眼をむけたブラシカの顔に、もはや笑みはなかった。いつも穏やかな表情をたたえている顔に、狂気が満ちている。
フラワーマスターはその端正な顔に、嫌悪を表した。ゆっくりと、ブラシカの周囲を動き、ブラシカと対面する。

「一人、犠牲が出ている。すでに問題になっているのですよ。ブラシカ卿」
「それがどうしたのです。あなたさえ喋らなければ、誰も私を疑いはしない」
余裕の笑みを浮かべたブラシカを、フラワーマスターは冷たい眼で見やった。
「口を封じる。と、言うことですか」
淡々とした口調で問う。
ブラシカの、フラワーマスターに答える声は、あくまで余裕に満ちている。
「それは、あなた次第ですよ。マスターデュオン。大切なお仲間を亡くしたくはないでしょう？　今も見張らせているのですよ、私の一言で、彼らをいつでも殺すことができる。ああ、でも。私だって、無駄な犠牲は出したくない。あなたの弟子もあの子どもも、私には恨みなどないのだから」
フラワーマスターは、不意に俯いた。
「ふふふ。どうしたのです、マスターデュオン。降参、ということですか」
勝ち誇ったような声を出すブラシカの耳に、低い声が届く。
「ブラシカ卿。ケンム草の花言葉をご存じか」
「花言葉？」
訝しげな声を上げたブラシカに、フラワーマスターは一度顔を上げ、頷いて見せた。
「ええ、花言葉ですよ」
そう言った顔に、焦りも敗北感も見ることはできなかった。ただ、冷たく冴え切った双眸がブラシカを捉えた。
「ケンム草の花言葉は……」
フラワーマスターは、そこで一旦言葉を切って、口の端を吊り上げた。
「復讐」

不意に、ブラシカは腕に何かが巻きつく感覚に襲われた。持っていた灯りが、落ちる。灯りは地面に転がり、影が大きく揺れる。
「な、何だこれは」
驚きの声を上げたブラシカを淡々と見つめ、フラワーマスターは声を上げた。フラワーマスターの髪が風もないのに、なびく。
「さあ、復讐の始まりだ」
ブラシカの腕に巻きついたモノは、凄まじい力で、ブラシカの腕を下へと引っ張ってくる。ブラシカは、自由なはずのもう片方の手を動かそうとして、そちらの腕も動かないことに気づく。いつの間にか、何かがブラシカの自由を奪っていた。
腕だけではない。足にも何かがからみつき、締めつける。
「何だ、何が、どうなってる」
切迫した声を上げたブラシカの耳に、よく通るフラワーマスターの声が届く。
「よく見ろよ。その正体が何か分かるはずだ」
言われるまま、視線をおろしたブラシカの目に映ったモノ。花を刈られたケンム草がその茎や葉を長く伸ばし、ブラシカの体に巻きついている。後から後から、蠢くように伸びてくる茎や葉は、音を立てながら、腕や足。そして胴にも巻きついてくる。必死に抵抗しようとしても、体がいうことを聞かない。凄まじい力。
「た、助けてくれ」
首に巻きついてくる茎を、払い落とすことも出来ず、ブラシカは声を上げる。
「こんな、冷たく暗い場所へ移されて。さぞ悔しかったんだろう。俺はこいつらの復讐を止める気はないよ」
またしても強い力で、引きずられ、とうとうブラシカは体を横たえた。抗うように上げた腕も、すぐに引き戻される。顔をも覆ってくる茎の隙間から、どうにか首を巡らせて、フラワーマスターを捜す。
その眼に、フラワーマスターの姿が映る。彼は入口に向かって歩

いていくところだった。
「わ、私を見捨てるのか」
その大声に答えるように、フラワーマスターが告げる。
「いいことを教えてやろう。ブラシカ卿。先ほどここを発った商人たちは、今頃西方軍に捕まっているはずだ。もうすでに、軍は動いていたんだよ」
「くそっ」
纏わりつく茎によって、視界の大半を覆われたブラシカの耳に、フラワーマスターの声が届く。
「悪いことをすれば、必ず報いが来るんだよ」
その言葉を最後に、フラワーマスターの声は聞こえなくなった。
残ったのは、茎や葉のこすれる音と、ブラシカの悲鳴だけだった。

第十話　復讐の後

月が支配する夜。王都にある広大な屋敷の中。アキレアの前に佇む美しい女性が、口を開く。

「わたくしは、ある人に恋をしました。その人は屋敷の使用人でした。わたくしは、彼を愛し、身を任せてしまった」

アキレアは、無言で女性を見やる。

「それは、公爵に出会う前ということですか」

この美しい女性は、現在アネモーネ公爵夫人と呼ばれている。彼女は美しい顔に哀愁を漂わせた。

「ええ。……わたくしは、彼との間に子を身籠りました」

驚きに息を飲んだアキレアに、苦笑を洩らし、アネモーネ公爵夫人は言う。

「父は、烈火の如く怒りました。わたくしは生まれた子どもを見ることも叶わなかった。父は、子どもと一緒に、彼を遠く、西の地へ追いやってしまったのです」

深夜。人気のない屋敷の中。アキレアは、月明かりに照らされた妖精と見紛うばかりに美しい女性を見つめる。この美しく儚げな女性に、そんな過去があったとは。信じ難いこの告白に、アキレアは返す言葉が見つからない。

「公爵家に嫁ぐことが決まったとき、わたくしは、父に頼みこんで、子どもに会いに行きました」

いつも澄んだように響くその声が、暗く沈んでいる。

「あの子は、あの小さな彼は独りだった。わたくしの愛したあの人は、彼をおいて、女性と逃げていたのです」

片手で顔を覆い、俯く女性。

「彼を連れて逃げたかった。何も知らず、無垢な笑顔を向けてくれるあの子を連れて。ですが、わたくしには、出来なかった。わたくしは、彼から逃げたのです」

声を詰まらせるように、女性は言葉を切った。
アキレアは、そんな女性に声をかける。
「どうして、そんな話を私に？」
女性は、俯けた顔をあげ、真摯な瞳を向けた。
「あなたは、西へ向かって旅に出ると聞きました。どうか、彼が……あの子が今どうしているか、それを調べてほしいのです」
アキレアは、言い終えた彼女を静かに見つめた。

夜が明けてしばらくすると、ブラシカ卿の屋敷に西方軍の兵士が数名やってきた。その兵士たちによって、ブラシカ卿は、薬草園の地下で枯れた茎に半ば体を埋めるようにして気絶している姿を発見された。屋敷の使用人も数名、西方軍によって連れて行かれ、屋敷は閑散となった。

「みんな、枯れちゃった」
悲しげな声を出し、シオンはしゃがんで茶色く変色した茎や葉に手を伸ばした。掴んだそれがもろく崩れていく。
「オレが、二回目の水やりしなかったから、枯れちゃったのかな」
傍らに立つアキレアを見上げ、シオンは潤んだ瞳を向ける。
アキレアはそんなシオンの頭に手を置いて荒々しく撫でた。
「いいや、みんなお前には感謝していたよ。彼らはちゃんと生ききったんだ」
「そうなのかな」
呟かれたシオンの言葉。この小さな胸に、何を思うのか。親はいず、信じていた領主には裏切られ、仕事を失くし。育てていた花は枯れてしまった。
この小さな体に振りかかった悲しみを思うと、アキレアはやるせなくなる。

「なあ、シオン」
アキレアの呼びかけに、シオンは立ち上がった。立ち上がってもシオンの背丈はアキレアの腰よりも低い位置にある。
「何？　マスター」
カボックの真似をしたのだろう。アキレアをマスターと呼んで、シオンは顔を上向けた。緑色の澄んだ瞳がアキレアを映す。
「カボックが、もうすぐ俺の付き人を卒業するんだよ。それで、もしよかったら。一緒に王都へ来ないか？」
その誘いに、シオンは目を瞬かせた。
差し出されたアキレアの大きな手と顔を交互に見比べ、シオンは口を開く。
「淋しいのか？」
気遣うように言われたその問いに、アキレアは一瞬言葉を詰まらせた。
「あっ、ああ。そうだな」
その答えを聞き、シオンはそっと小さな手で、差し出されたアキレアの手を握った。
「なら、しょうがねーからオレが一緒にいてやるよ」
笑顔で言われたシオンの言葉に苦笑し、アキレアはシオンの手を握って歩き出した。
地上へと向かう階段を上りながら、アキレアはそっと呟くように言った。
王都に行ったら、お前の母親に合わせてやるよ、と……

第十一話　再会

西方の地。ナスタチウムから王都へと帰ってきたその日。カボックと別れ、アキレアとシオンはある場所へ向かった。
二人の向かった場所。それは、王都の中でも広大な敷地として有名な、アネモーネ公爵邸である。
アキレアは、公爵に用があるからと、シオンに庭で待っているように言い置いて、屋敷の中へ入って行った。
シオンは言われたとおり、広い庭に下りた。庭というよりは庭園といった方がいいだろうか。
庭園に下りたシオンを色とりどりの花が出迎えた。
誇り高く咲き誇る花々。花々の芳香が辺りに漂う。
心落ち着く空気を、深く吸い込んだときだった。
シオンはふと、庭園の中に、女性が佇んでいることに気付いた。
シオンはその女性の姿に目を奪われた。
シオンが今よりも小さい頃。ナスタチウムと呼ばれる西の地で、出会った妖精がそこに立っていたのだ。
アキレアの言葉が、耳に蘇る。
その妖精こそが、お前の母親だ。そう言ったアキレアの言葉が。
シオンは手にした一輪の花を見る。ここへ来る前に、初めて花売りから買った花だった。
もちろん、母へ贈るために。
女性はまだ、こちらに気づいていないようだ。
咲き誇る花々に目を奪われているらしい。
シオンは、女性との距離を少し縮めるために歩き、女性に呼びかけるために口を開いた。
「お母さま」
女性に呼びかけようとしたまさにその時。シオンの背後から、甲高い声が上がった。

女性がこちらを振り向き、驚いたように眼を瞠る。シオンは確かに女性と目があった。
それと前後して、駆けるような軽い足音がシオンの背後から迫ってくる。
その足音がシオンの横を通り過ぎようとした。そちらを見やったシオンの目に、シオンよりも小さな子どもの姿が映る。
シオンと同じ金色の髪。そして、シオンよりも小さな体。その体が、不意に傾いだ。
思わず、シオンは手を伸ばす。気づいた時には、躓いた子どもを抱きとめていた。
「ありがとう。お兄ちゃん」
屈託のない笑顔で言われ、シオンは笑顔を返す。
すぐに態勢を立て直すと、子どもは女性に向かって駆けて行く。
子どもは嬉しそうな顔をして、女性に抱きついた。
その子どもの背に、手を添えた女性。しかし、その眼はいまだシオンを見つめている。
シオンはうろたえ、視線を彷徨わせてしまった。
そんなシオンの耳に、柔らかな声が届く。
「あの、あなたは……」
女性の言葉を途中で遮るように、シオンは声を上げた。
「あ、あの。オレ……じゃなくて、ぼ、ボクは。あのっ。マスター。そう、マスターデュオンの弟子、弟子なんです。マスターデュオンに、ここで待っているように言われて」
とっさに、手に持っていた花を背後に隠し、シオンは言った。
声を上ずらせるシオンを笑うこともなく、女性は優しく問う。
「そう。名前は？」
「シ、シオン」
そっと窺うように、目を上げる。女性は目を細めて、シオンを見詰めている。
長い睫を伏せて、女性は抱きついている子どもの手を取った。子

どもと一緒にシオンの前まで来ると、女性はシオンに声をかける。
「そう、シオン。シオンっていうの。とても良い名前ね」
女性の声が少し震えているような気がするのは、気のせいだろうか。
シオンはふと、背後に隠した花の存在を思い出した。
それを胸の前に出す。
「あの、これ。さっき買ったんです、よかったら」
目をつぶって、シオンは花を差し出した。
「これを、わたくしに？」
女性の声が届き、シオンは目を瞑ったまま何度も頷いた。
しばらくして、花が受け取られ気配を感じ、シオンはそっと目を見開き、女性を見上げた。
その瞳に、嬉しそうに目を細めた女性が映る。
「ありがとう。とても、綺麗だわ」
「あの、それじゃ、オレ、じゃなくて、ボクはこれで。お邪魔しました」
そう言って、踵を返し、逃げるようにして走り出す。
そんなシオンの背に、女性の呼びかける声が聞こえた。
だが、シオンは聞こえないふりをして、庭園を後にした。

残された女性は、貰った一輪の赤いバラ手にしたまま、ドレスが汚れるのも構わずに、地面に膝をついた。
女性はその赤く美しいバラを見つめ、その花の花言葉を頭に思い浮かべていた。
赤いバラの花言葉。
それは……

あなたを、愛しています。

「お母様？　どうしたの？　おなかイタイ？」

たどたどしい口調で、気遣う声をかけた息子を、女性は抱きよせた。
「何でもないの。何でもないのよ。ごめんね……」
ごめんなさい、シオン。
胸の中で、名を呼んで。
女性は抱きしめてやることすらできなかった息子を思う。
そしてただ、ごめんなさいと、呟き続けた。

第十二話　思い

公爵邸を飛び出して、シオンはあてもなく歩いた。
いつの間にか、市街を出てしまったシオンは、人気のない森の中に辿り着いた。
そこで立ち止まると、シオンは力尽きたようにその場に座り込み、放心したようにじっと正面を見つめる。何も考えられないというように。

どれくらい時間がたったのだろうか。
それすらも分からなくなった頃。
シオンは背後に人の気配を感じて、立ち上がった。
温かい木漏れ日が降り注ぐ中、姿を現したのはフラワーマスター。その人だった。
「マスター。どうして、教えてくれなかったの？」
「何をだい？」
静かなアキレアの問いに、シオンは声を上げる。
「お母さんに、新しい家族がいることを……」
教えてくれてたら、逢いになんて、行かなかった。
自分の横を通り過ぎた小さな体。金色の髪を揺らして走り、母親に抱きついた小さな子ども。その姿を思い出し、シオンは胸に痛みを覚える。
「会ったのか？　あの子に。可愛かっただろう。お前の弟だ」
おとうと。
その響きに、顔を上げ、アキレアを見る。
「何を驚いた顔をしてる？　母親が同じなんだ。あの子はお前の弟だよ。お前はあの子のお兄さんだ」
シオンは、ふいにアキレアに背を向けた。俯き肩を震わせる。
「どうした？　シオン」

アキレアの穏やかな声に、シオンは背を向けたまま口を開く。
「そうか、弟なんだ。弟か……」
その声に、涙が滲む。
「シオン？」
アキレアがこちらに近づいてくる気配がする。シオンはなおも振り向かず、言葉を続けた。
「オレ、アイツが羨ましかったんだ。アイツ、オレの前でお母さんに抱きついて。お母さんと手をつないで。オレだって、お母さんの子どもなのに……」
傍らに、アキレアが立ったことに気づいたシオンは顔を上げた。アキレアを見上げた瞳に、涙をいっぱいに溜めて。
「オレ、アイツのこと妬んだんだ。アイツばっかり、お母さんに愛されてずるいって。なんでだろうって。オレはいつも独りだったのに。そう思ったら、なんだか憎らしかったんだ。でも、オレ、あいつのお兄ちゃんなんだよな。なのに。オレ、なんでこんな、酷いやつなんだろ」
大きな瞳から、涙がこぼれおちる。
「シオン。なあ、シオン。お前だって、愛されてるよ」
泣きじゃくるシオンの背に片手を添えて、アキレアは言う。シオンは大きく首を横に振った。
愛しているなら、どうして、傍にいてくれない？
どうして、自分は独りなのだ。
そんな思いが頭をよぎる。
「シオン、お前の名前は、あの人がつけたんだよ。お前の母親がつけたんだ。シオンっていうのは、花の名前なんだよ」
シオンはゆっくりと、涙にぬれた緑の瞳を、アキレアに向ける。
「シオンの花言葉は、あなたを忘れない。お前の母親は、お前の名を呼ぶたびに、お前を忘れないと、自分に言い聞かせていたんだ」
それから。と、言って、アキレアは指を鳴らした。すると、何もなかった空間から、突如花が現れる。巻尾状の花穂に藍色の小花を

多数つけた、愛らしいその姿。
その花は、シオンにとって忘れることのできない花。
初めて母親と会った時。別れ際に手渡された花が、この花だった。
「これ、この花……」
嗚咽の合間に、シオンは声をだす。
アキレアは優しい笑顔をシオンに向けた。
「お前に、母親が渡した花だろう？　この花の、花言葉を知っているか」
聞かれて、シオンは首を横に振った。金髪がその動きに合わせて揺れる。
シオンはその花の名前すら、知らないのだ。
「この花は、勿忘草（わすれなぐさ）というんだ。そして、この花の花言葉は、私を忘れないで」
シオンはじっと、藍色の小花を見つめる。

私を忘れないで。

その思いを胸に、母はシオンにこの花を贈ったのだろうか。
忘れてほしくないと、そう、願ったのだろうか。
「それから、この花には、もう一つ花言葉がある。この花のもう一つの花言葉は……」

真実の愛。

「彼女は、嘘偽りなく、お前を愛してる。なあシオン、お前も、愛されてるんだよ。間違いなく、おまえは愛されてるんだ」
堪えきれず、シオンは声をあげて泣き始めた。
そんなシオンを、アキレアは優しく抱きしめる。
抱きしめてやれなかった、母親の代わりに。
シオンが泣きやむまでずっと、抱きしめ続けた。

シオンたちが王都へ到着してから十日余りが経過した。
カボックは、当初の予定通り、晴れて王宮付きの花使いとして新しい任務についている。
そんなカボックの代わりに、シオンはアキレアの世話を焼いた。
はじめのうちは失敗ばかりしていたが、それなりに言われなくても動けるようになってきた。
だが、まだ慣れないこともある。
それは、敬語を使うことだ。ついつい粗雑な言葉が出てしまう。敬語に慣れるには、まだまだ時間が必要なのかもしれなかった。

シオンにあてがわれた、小さな部屋には机がある。シオンが勉強できるようにと、アキレアが買い与えてくれたものだった。
その机の上に、小さな花瓶が一つ。
その花瓶に活けられているのは、あの日、アキレアがどこからか出したあの藍色の小花だった。いまだ枯れず、その可憐な姿を留めている。
母親が、初めてシオンに与えたものと同じあの小花。
シオンは毎日、その花を眺める。

ここにはいない、母親の思いを感じながら。

第十二話　思い（後書き）

ここまで、読んでいただきありがとうございました。
今回は文樹妃さま主催『春・花小説』企画に参加させていただいた作品となります。
春の花とその花言葉をテーマに小説を書くというこの企画。
せっかく企画に参加させていたけるということで、なろうへの投稿といたしましては、初ジャンルのファンタジーに挑戦させていただきました。
いかがでしたでしょうか。少しはお楽しみいただけていたら幸いです。

ファンタジーを書いてみて思ったことは。やはり、ファンタジーは難しいということです。いつか、うまく書けるように精進します。

さて、企画の規約の方で、イメージした花とその花言葉を書くとありますので書いてみます。
えっと、もうたぶんお分かりかと思いますが、この作品のメインは勿忘草です。花言葉は私を忘れないで。
そうです。あの、シーンを書きたいがために、その前のシーンをくっつけていった感じです。
出典先は春・花小説企画のサイトにのっているのをそのまま使わせていただきました。

それでは、最後にもう一度。

ここまでご覧いただき本当にありがとうございました。
そして、文樹妃さま。素敵な企画に参加させていただきありがとうございました。
もしかすると、もう一作投稿させていただくかも知れません。その際は、またよろしくお願いいたします。

それでは、また。
お会いできることを願って。
愛田美月でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5534g/

フラワーマスター

2010年10月8日15時48分発行